

治・社会情勢のみならず、フランス政府の状況や隣国タイとの関係なども視野に入れ、描きだしたことは高く評価できるだろう。ただ、評者がひとつ疑問に感じたのは、フィールドワークの聞き取りが、2007年時点の状況に限られていることである。インフォーマントのなかに、たとえば、1960年代、70年代について記憶がある人はいなかったのだろうか。記憶の扱いには一定の注意が必要であることは確かだが、人びとの記憶と新聞記事の内容とを照らし合わせれば、当時の状況に関する分析と考察により厚みが増したのではないかという思いを、部外者の安易な期待では、と自戒しつつも抱いてしまうのである。余談になるが、植民地時代について、エクサンプロヴァンスのANOM (Archives nationales d'outre-mer) にある公文書等の資料のなかに、何か新しい発見があるかもしれないので、機会があればぜひ、調査することをお勧めする。

阪本公美子、『開発と文化における民衆参加—タンザニアの内発的発展の条件』
春風社、2020年、520 p.

中澤芽衣*

「その地域に根付く文化が、発展を阻害する。」

果たして、このことは本当に正しいのか。著者は、タンザニアで国連職員として働いていた際、アフリカの地方政府高官をはじめと

したエリート層によって「文化が開発・発展の障害となる」と語られることに、違和感を抱いたという。この違和感を出発点として、著者は地元の文化と調和した開発のあり方を探求するべく、タンザニア南東部リンディ州をフィールドとして研究に取り組み、その成果をまとめたのが本書である。本書は520ページにわたる大著であり、開発政策の歴史的変遷や文化の概念だけでなく、タンザニアの自然環境やスワヒリ文化の創出過程など幅広い内容を扱い、学際的な視点から開発と文化の諸相について論じている。本稿ではその内容の一部を抜粋しながら、紹介していきたい。

本書は、第I部「タンザニアにおける開発と文化を再考する」と第II部「タンザニアにおける内発的な視点に基づく社会開発」の2部で構成される。序章では、先述した著者の本書執筆の動機と意義について触れられている。その後、主要な用語である開発・発展、文化、参加について詳説される。最後に、研究対象地域であるタンザニア南東部リンディ州と研究方法を簡単に説明する。

第I部では、開発と文化という2つのキーワードを取り上げ、それらの関係性（対立もしくは調和）について再考される。第1章では開発概念の歴史的な変遷を追ったあと、文化の位置付けに関する文献レビューをおこなう。まず開発の起源に触れ、時代ごとの開発の特徴とその変化について、4つの時代（1950～60年代、1970年代、1980～90年代、2000～10年代）に分けてまとめている。これまでの開発政策を見返すと、経済成長が中

* 高崎経済大学地域政策学部

心で、物的資源の欠如に苦しむことが貧困とされた。そのため、「成長と援助から成る開発政策が、低開発を解決する唯一の答え」(p. 58)であった。

1970年代に突入すると、基本的人間ニーズという考え方が登場する。開発の目的は、これまでの経済成長中心の開発政策から、人間の生活に最低限必要とされるもの(衣食住や医療、教育)を提供することに取って代わられた。1990年代には人間開発指数が提唱され、2000年代以降、ミレニアム開発目標や持続可能な開発目標などの多様な目標が設定された。多岐多様な目標が定められたが、これらの開発政策はトップダウンで実施され、民衆の文化や参加が重視されてこなかったことを著者は指摘する。

第1章の最後の節では、タンザニアの文脈で開発と文化がどのように認識され、政策が実施されてきたのかを詳述している。独立後のタンザニア政府は、「開発 (*maendeleo*) という概念を、貧困からの自由を強調する社会開発というだけでなく、伝統文化 (*utamaduni*) に基づく自立」(p. 92)と定義し、文化を開発の基礎として考えた。初代大統領ジュリウス・ニエレレは、「我々すべての部族の伝統と慣習から最高のものを探し出し、それらを我々の国民文化の一部にする」(pp. 92-93)ことを掲げ、共同体のなかで互いに助け合い、年長者を敬う伝統的アフリカ文化(ウジャマー)に基づく国家の発展を目指した。ニエレレ大統領は農業の重要性を説き、共同体が集団で農業を営むウジャマー村の設立を推奨した。しかし実際のところ、共

同村落化は民衆といった草の根の参加を疎外するかたちで推し進められ、上からの政策は文化と開発のあいだに対立を生み出す結果を招いた。

著者は、開発分野における「文化は開発の障壁」という問題意識を踏まえて、開発と文化の関係について検討している。開発現場は、障壁にしる、促進剤にしる、文化を道具として認識してきた。しかし、著者は「文化を開発過程の現れとして理解」(p. 109)し、異なる視点から開発と文化の関係性を捉える。文化を開発の基礎として考えるとき、開発と文化は調和し、内発的發展がもたらされるということが強く主張される。

第2章では、「現在のタンザニア文化は、世界の他の地域における文化と同様、多様な環境、歴史的遭遇、民衆の行為に基づいて創出された」(p. 113)ことから、タンザニア文化の創出過程とその多様性についてまとめている。ここでは、米山 [1990: 17] をもとに著者が概念化したモデルを用い、自然環境と社会過程、文化過程が相互に作用することで、文化が創出され、アイデンティティが形成されることを説明している。第1節ではこの概念モデルにあてはめながら、タンザニアの自然環境や暮らし方、言語、宗教、アイデンティティの創出過程を記述する。タンザニアの豊かで多様な自然環境のなかで、人々は農耕や伝統的牧畜、漁業といった生業を確立し、ときに外からもたらされた換金作物などを導入して取り入れることで、多様な暮らし方を紡いできた。地域ごとに異なる言語や宗教も、生態システムと人々の暮らし方に基

づいて発達してきた。これらが相互に作用し、外部からの影響（アラブ世界との交易や植民地化、国民文化の創出）を受けながら、多様な文化やアイデンティティが生まれる。最後に、リンディ州の文化やアイデンティティの多様性・多層性について、自然環境や人々の暮らし方、言語、文化の点から分析している。

第Ⅱ部「タンザニアにおける内発的な視点に基づく社会開発」では、第Ⅰ部の内容を踏まえ、タンザニアの開発過程において、民衆の参加を意識した社会開発が実現されたのか、あるいはされなかったのかを検討している。

第3章ではタンザニアに焦点をあて、独立以降に実施された政策の特徴を年代別で比較し、それらの政策が与えた影響について分析している。1960～70年代のタンザニアでは人口の大多数が農業従事者であり、自力更生を実現するには農業の開発が不可欠とされた。農業に重点をおいたウジャマー政策が実施されたが、結果的に一部の人しか利益を得られず、農村と都市間、農村内における所得格差が拡大した。農業を強調しすぎた反省を踏まえ、政策転換が図られた。1980年以降、タンザニアは構造調整時代に突入する。構造調整は内発性に欠け、外発的なプロセスのもと推し進められた。債務の削減を背景に、初等教育費の親への負担増や保険医療サービスの悪化が引き起こされ、金銭的な余裕のない人は社会サービスにアクセスできなくなった。

社会サービスの後退による貧困者の増加を

踏まえて、1990年代後半には貧困削減の対策がとられた。経済自由化が促進され、経済面では安定した成長を実現した。実際のところ、鉱物資源と外国資本に対する依存を促し、資源収奪や環境破壊といった新たな問題を引き起こした。これらの政策もまた、民衆にとって外発的なものであり、民衆の参加や主体性は考慮されなかったことが指摘されている。著者は根本的な社会開発のためには、「民衆が発展の過程に内発的に参加することが重要である」（p. 365）と示し、次章では多様な主体が発展過程に参加するために必要な条件を検討していく。

第4章では、タンザニアのなかでも「貧しい州」としてみなされているリンディ州内の5ヵ所で行ったグループ討論・インタビューの内容から、内発的発展の社会開発に必要な条件が明らかにされる。老若男女問わず合計248名がこのグループ討論に参加した。生業・年齢・性別の違いによって、開発・発展と文化の関係性の捉え方は異なり、矛盾することもある。たとえば農業に重きを置いた政策は、農業従事者すべてに対して恩恵を与えるため、多くの人々は農業を開発と文化の調和する場として挙げる。

しかし年長者と若者のあいだでは、成男儀礼といった祭祀に対する捉え方は異なる。年長者は「生活を通して身につけてきた社会の規則を若者に教える機会」（p. 438）だと考え、開発と文化が調和する場として認識する。一方で、若者は「年長者によって管理される文化に基づく抑圧」（p. 438）と抵抗感を示し、祭祀を開発と文化の対立する場だと

考える。つまり生業・年齢・性別を軸にして主体が変われば、開発・発展と文化の定義は変化し、両者は対立もしくは調和の二項対立で考えられるものではないのである。内発的発展の実現には、多様な主体の対話が不可欠であることを筆者は主張する。終章ではこれまでの要点を整理したうえで、内発的な社会開発に必要な5つの条件が提示され、本書は締め括られる。

本書の内容を概観したうえで、まずは評者なりに本書の気になった点を挙げてみたい。本書では広範な分野で論が展開され、ひろく開発と地域文化に関して詳細な議論を学ぶことができる。その一方で、読者が開発の変遷や文化の概念、タンザニアで実施された政策について、基本的な知識をもちあわせていないと、本書前半で取り上げられる理論的な枠組みと後半のフィールドの事例を結びつけて理解することが、少々難解となるかもしれない。

著者は248名からの協力を得て調査を遂行しており、協力者の多さは著者が調査のなかで地域住民と良好な人間関係を築いてきた結果であると思われる。しかし、本書ではグループ討論の一連の会話や調査地域の人々の語りが十分に描ききれておらず、評者としてはもっとリンディ州に生きる人々の声を聞きたいと思った。ぜひとも、年長者と若者のあいだで繰り広げられた祭祀に対する談論などを緻密に記述し、開発と文化を受容・抵抗することに対する地域住民のリアルな感情の揺れ動きを描きだしてほしい。

いくつか評者の感じた細かな点を挙げた

が、これらは本書の価値を決して損ねるものではない。用語の解説や文献レビューは重厚であり、非常に勉強になる。タンザニア研究者や国際協力を志す人には、必ず手にとってほしい1冊である。本書では理論とフィールドワークの双方から、著者の違和感に基づく問題意識について、丹念にひもとかれ、開発と文化をめぐる多様な状況と内発的な社会開発に必要な条件が明らかにされる。問題が複雑に絡みあう現代社会において、民衆を主体とした社会開発をおこなう姿勢は、すべての人々にとって必要であり、本書は持続可能な開発目標が掲げる「誰ひとり取り残さない社会」の実現に寄与する視点をもたらしてくれるだろう。

引用文献

米山俊直. 1990. 『アフリカ農耕民の世界観』弘文堂.

Sonam Kinga. *Democratic Transition in Bhutan: Political Contests as Moral Battles*. London and New York: Routledge, 2020, 306 p.

石内良季*

本書は、ヒマラヤ山脈の南麓に位置するブータン王国（以下、ブータンとする）において、君主制と民主化の変遷が、主に2007～2008年にかけて行なわれた選挙とその後の展開にどのような影響を与えたのかを分析

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科